

東邦大医 ○岡本一枝 奥平進之
東邦大医短 工藤優子 横屋智明

【目的】高齢化社会の進行とともに、高齢者の生活環境に関する研究の報告はあるが、日常生活動作能力(ADL)に着目した報告例は少ない。そこで、都内の某特別養護老人ホーム入所者の居室及び寝床内気候を測定し、ADLとの関係を検討することを目的とした。

【方法】測定期間は平成6年8月上旬とした。被験者は、食事・排泄・移動・入浴の介助を必要とし、ベッド上で過ごすことの多い非活動群10名(男性5名・女性5名)と、ホームの日課にそって自主的な活動が可能な活動群12名(男性5名・女性7名)とした。背部、足部の寝床内気候と室内温湿度は連続24時間測定し、同時に睡眠感・温冷感の主観申告、着衣・就寝状態・生活活動の調査をした。結果は、両群をさらに男女別に4群間で比較した。

【結果】部屋の温度は冷房調節されていたが、日中、夜間ともに活動群女性が25℃と、他群よりも有意に低かった。湿度は4群ともに、RH50～70%の間に保たれていた。背部、足部の寝床内温度も、日中は活動群女性(背部:27℃、足部:27.8℃)が、他群よりも有意に低かった。しかし、夜間では有意差は見られなかった。就寝中の掛け寝具の枚数は、活動群女性が少いのに対し、着衣の枚数は多い傾向であった。睡眠感も、活動群女性が他群に比べ良い傾向であった。